2018.11.10

○○中学校　第1学年　　社会科通信

なんでやねん

発行責任者　倉橋　忠

No.37

通貨(お金)の始まり と 通貨の価値(お金の値打ち)

貨幣とは

お金は、専門用語では「貨幣」と言う。その「貨幣」には次の3つの性質があると言われている。

① 交換手段 … 商品を手に入れるために、商品の対価として渡す。

② 価値尺度 … 価値(物の値打ち)を表したり計算することができる。

③ 価値蓄蔵手段 … 未来に商品と交換するために、貯めておくことができる。

そして、通貨は、辞書では「貨幣と同じ意味」だとされるが、専門的には、上の①の交換手段の機能に重点が置かれて理解されることが多い[*1]。

無文銀銭

日本初の金属通貨は何か

日本の歴史を見ると、金属の通貨が流通するまでは、布(主に麻布)・米・塩などが通貨として使われていた。

富本銭

これまで、最も古い金属通貨だと考えられてきたのは、708年に発行された和同開珎である。しかし、1998年(平成10年)に飛鳥池遺跡から富本銭が発掘されると、最古の金属通貨は富本銭だと考えられるようになった。富本銭は、天武天皇時代の683年に発行された銅とアンチモンの合金の通貨である。残念ながら今のところ、どのように流通したのか、その実態は不明である。

和同開珎

教科書には、富本銭が最古の金属通貨だとされている。しかし、近年の発掘調査から日本最古の金属通貨は、無文銀銭という銀貨だと分かっている[*2]。これは、遅くても660年代ころにはあったようである。ただ、質量が10.5グラム前後で、銀の純度は95%以上であり[*3]、高額の通貨だったので庶民の生活に使われたと考えることはできない[*4]。

結局、今のところ金属貨幣で流通状況が分かるのは、和同開珎になりそうである。

---

*1　高木久史『通貨の歴史』中公新書 2016年 p.4。
*2　村上隆『金・銀・銅の日本史』岩波新書 2007年 p.59。
　　同旨、前掲、高木久史『通貨の歴史』p.8。
*3　前掲、村上隆『金・銀・銅の日本史』p.60。
*4　前掲、高木久史『通貨の歴史』p.9。

和同開珎は朝廷の「支払い」のために発行された

和同開珎には、銀銭と銅銭がある。和同開珎銀銭は、無文銀銭を回収して、それを溶かして作られた。和同開珎銅銭は、初期の物は富本銭と同じ銅とアンチモンの合金だったが、後に銅とスズの合金、すなわち青銅で作られた。

和同開珎の発行(708年)の目的は、平城京の建設などのための物資の購入や、働いた人たちに支払うために使うためであった。朝廷は、高額取引では銀銭、小額取引では銅銭を使えと命じた。米や布での取引ではなく、銭での取引を人々にすすめたようである。ただ、朝廷は銀銭の発行を709年に取りやめている[*5]。

和同開珎1枚は銭1文　その価値はどれくらい？

奈良時代の初め、平城京建設で働く労働者の日当(1日あたりの賃金のこと)は、銭1文だった。そう考えると、平城京建設の時代の和同開珎は小銭ではなかったと言える。

そして、710年、朝廷は銭の値打ちを法定した。それによれば、銭1文＝籾殻つきの米6升(現在の4割の量。現在の2升4合、4,320グラム)である。当時の労働者のもらった賃金は、1人1日3合食べるすると8人分の米だった。これを現在の米の価格(1升(1,800グラム)＝800円)で換算すると、銭1文＝1,920円になる。

その後、朝廷は10世紀までに、和同開珎だけでなく多くの銅銭を発行した。それを皇朝十二銭と呼ぶ。なお、実際の銭は12種類以上の物が発行されている。

760年に万年通宝(銅銭)が発行された。朝廷は通貨の発行で利益を上げようとして、万年通宝1枚＝和同開珎10枚の価値と決めた。しかし、庶民はこの定めには従わず、万年通宝も和同開珎と同じように扱ったようである。

さらに、760年代には、飢饉や戦争(藤原仲麻呂の乱)などがあって、商品量が不足し、物価が上がり、銭の値打ちは下がった。たとえば、760年代の近江の石山寺の建築に携わった労働者の日当は、約10文～15文だった。当時の米価は、約2合(現在の0.8合、144グラム)が銭1文であった。これを現在の米価(1升＝800円)で換算すると、銭1文は64円ほどの値打ちになってしまう[*6]。

710年代には銭1文で米6升(60合)の価値(法定)だったので、銭の値打ちが大きく下がっていることがわかる。文字通り、銭は小銭となり値打ちがなくなっていった。

やがて、朝廷は銭の発行をやめるようになった。

銭は、全国で使えた(流通した)のか？

奈良時代の銭は、畿内で流通したが、そのほかの地方では浸透しなかった[*7]。つまり、中国・四国地方や北陸・関東・東北地方では米・布・塩などが通貨として使われていたことを忘れないようにしたい。このことが、地方から都に働きに出かけた人たちに待ち受けていた運命を悲惨なものにしたからだ。

---

*5　前掲、高木久史『通貨の歴史』p.13。
*6　山口博『日本人の給与明細』角川ソフィア文庫 2015年 p.282は、銭1文＝42円とする。
*7　前掲、高木久史『通貨の歴史』p.18。